
ようこそ、宵闇町五番街へ。

志紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ、宵闇町五番街へ。

【Nコード】

N4185Y

【作者名】

志紅

【あらすじ】

無^{まほろし}法^{ほろし}地帯^し幻影^し町。その最奥人外すら暮らす危険区域“宵闇区”万^し事^し解決^しを^しモ^しット^しー^しに掲^しげる^し解^し決^し屋^し。ある日事務所を訪れた少年の依頼^しから、物^し語^しは^し動^しき^し出^しす^し…。

序章 サービス（前書き）

完全なる志紅の趣味です。名前が変なのばかりです。

あと区分がわからなかったのでファンタジーにしましたが、違つかもしれません。

その辺をご容赦下さいm（）（）m

序章 サービス

この度は解決屋 酒月サカツキをご利用いただき誠にありがとうございます。当社は皆様がお困りになっている事件・悩みその他何でも、解決が導き出せる事柄でしたらどんなことでも承ります。

公表に気が乗らないこと、どこでも解決が難しいと判断されてしまったこと、そんな悩みには是非当社をご用命ください。たとえそれがどんなに困難な案件でも、必ずや皆様に御納得いただける結果を残す…それが当社のモットーです。

さあ本日も、皆様に御納得いただける解決をもたらしてご覧に入れますしょう…。

*

からん、とドアのベルが鳴った。

その音に猫谷ネコヤ三日月ミカツキはまさに猫よろしく耳をピクリと動かすと、怠そうな声で黄昏、と言ってまたソファに沈む。

呼んだというよりはただ咳かれたその声に、同じく面倒そうな顔で…けれどもきちんと答えて奥から青年が出て来た。そのままドアに向かった青年を、三日月はやはり怠そうに見守る。

しばらくして、ギィ、という音と共にドアが開いた。

青年…霧生黄昏キリユウ タンガレの後に着いてきた少し怯えた様子の女性の姿に、三日月はニッコリ笑って立ち上がる。思い切り勢いをつけて立ち上がった三日月に女性はびくりと体を震わせた。

「…あ、の、…!」

「OKOK、事情はそっちのソファで聞きますよ?…とりあえず、」

未だ不安げな女性に、満面の笑みと共にスツと手を差し出す。…好みではないかなと心の中でだけ呟いて。

「…ようこそ、宵闇町五番街“解決屋 酒月”へ!」

今回もまた、楽しめそうな予感がした。

一章 人生は思い通り

「さて、とお…。今回はどのような御用向きで？」

おねーさん、とにつこり笑って首を傾げると…27、8位かな、ギリおねーさんな感じの女性が頬を赤らめて口を開いた。ま、俺ってバイケメソですからねえ。フフン。

「…リリイを…私のペットを、探して頂きたくて…！」

継るような必死の視線に、いやいやじゃあ俺に見とれてる場合じゃないでそーと心の中で突っ込みつつ人差し指を唇にあてる。ふむ、と黙り込んだ俺に代わって今度は黄昏が女性に話しかけた。

「失礼ですが、“国”側の方ですよね？」

「え、ええ…。」

「なるほど、ペットの目撃情報があった…とか？」

でなければこんな危険な場所に来ないだろうと言いたげなニュアンス。対して女性は歯切れが悪い。

「はい、…いえ、というより…」

口を嚙み俯いた女性に黄昏は不思議そうだ。こらこら、きちんと思図を汲み取らなきゃダメじゃん。苦笑してとりあえず俺は言った。

「…もしかして、“怪猫”のペットですかあ？」

「…！どうして、」

弾かれたように顔を上げ、驚く女性に笑ってみせる。推測するのはそう難しいことでもない。

「ペットの現在地とか、普通はだいたいでそんなに目星は付かないもんですけどあ…あなたはわざわざここに来た以上、少なくとも“幻影町”^{まぼろし}にいると分かつてる訳ですよええ。じゃあそれはなんで…って逆算して考えれば、おのずとねえ？」

それでもまだ訝しげな表情の女性に俺は更に言葉を重ねた。こんなに頭働かせたのいつぶりでしょう。ていうか、なんで俺こんな言い訳みたいなこと言ってるんだろ？

「最近はあるまり、特に“お国”じゃあ怪猫なんて見かけませんし聞きませんよねえ。つまり、お国で見つかってしまったら恐らく大騒ぎになる。でもそれがないってことは…、無法地帯の幻影町かもしれない、ってところですかあ？」

「……はい。」

俯く女性に黄昏が呆れたようなため息を吐く。

「知らなかったならまだしも…、それなら国が使ってる首輪でも調達しておけば良かったのでは？」

口さがないねえ。まあ大いに賛成だけど。とニヤニヤ笑っていると、肩を震わせた女性が悲痛な声を上げた。

「首輪なら、してました！でも…いつもなら周期のとき側に付きつきりているんですけど、今回はどうしても外せない仕事があった…！それに、いつもよりずっと状態も良かった。なのに、家に帰ったら引きちぎられた首輪が落ちていて…。」

両手で顔を覆った女性にさすがに居たたまれなくなっただのか、黄昏

は若干居心地悪そうに顔を逸らす。じゃあ最初から言っつんじゃないよバカちゃんめ。

「あの子に、…リリイに何かあったら、私っ…！」

「落ち着いてください。」

どうやらまた興奮し出した女性の横に回って背中を軽く撫でる。頼りない背中は一瞬ひくりとふるえた後、少しずつ痙攣が引いていった。震えが完全に収まったのを確かめてから、俺はあえてのんきな間延びした声で女性に話しかける。…うんそこKYとか言わない！

「…原田さん、大体の事情は分かりましたあ。とにかくこの依頼

…“酒月”はお受けしまあす。」

「本当ですか！」

ガタンと音を立てて椅子から立ち上がった女性は良かった、と吐息を零した。お国の危険動物に指定されている怪猫の搜索依頼だ、他の探偵事務所なんかには頼めなかっただろうし、緊張するのも当然かもしれない。

ホントですよあ、と女性を安心させるように微笑み、けれど直ぐに顔を引き締める。

「まずは、…黄昏、」

「分かってる。」

即座に反応した黄昏は片手に持っていた地図　って呼べるほど立派なもんじゃないけど…　をテーブルの上に広げた。さっすが俺の弟子だけあるよねえ？

「これは…、」

「幻影町の全体の地図ですよあ。」

地図に目線を落とした女性に頷いてから、俺は地図の三区分されたうちの一つを指差した。

「ここが宵闇地区。三地区の配置なんかは…だいじょぶですよねえ？」

ちらりと目を向けると、女性は小さく首を動かす。もちろん縦にね。そうだろうとは思ってたけど、ここに入るのにきちんと下調べして来たんだろう。

「じゃあ話が早い。…恐らく色々考えるとお、一番リリイちゃんが居そうなのはあ…、」

ここですかねえ、と俺が指差した場所を上から二つの顔が覗き込んだ。

*

「…んー、あれかなあ？」

現在地、宵闇地区二番街商業エリア。

依頼人の原田さんから貰ったリリイの写真片手に、俺は首を傾げていた。

「グレーに黒の斑、青の瞳… まず間違いないと思っけど…」

ううん、とさっきより更に首を傾けて猫と見つめ合う俺の姿は、ま

あかなり珍妙なことだろう。それでも注目なんてされないのがこの町なんだけれど。…ていうか、こんなに近くで見ても逃げないとか、それだけでもこの猫が普通じゃないことの証明にはなる気がするけどねえ。

「むう…読みは合ってたけど、こんなに人…いや猫相が変わるとは

」

ペットとして飼われてた動物にそうそう狩りが出きるとは思えない。だから宵闇唯一の商業エリアであり、露店なんかもあるここに来るだろう、っていう俺予想。でも居なくなってから結構な日数食べてないっぽいリイ（仮）は、やせ細って写真とかなり変わっていた。さあどうすべきか、とまたまた首を傾けて。

「…あ、そうだ。」

確か原田さんは、リイは名前を呼ぶと誰でも返事をする…とか言ってたな。うんよし、それで行くしかない。

「…リイ？」

頼む返事して、もう手掛かりないんだよー、と祈る俺の思いが通じたのか。

「…ナン。」

少し怪しむようにじっとこちらを見ながら、それでもリイは小さな声を返した。

「うっしや！」

良かったと笑ってから原田さんに預かったキャリアを取り出すと、リリイはその中にゆっくりと入っていった。平和的解決万歳。

「うへへ臨時ボーナス…って、黄昏？」

「…ミカ、」

ニヤニヤしながら呟いていると、五メートル程離れた地点に黄昏の気配を感じて振り返る。どうした、と首を傾げると、黄昏がなんだか滅多にしないもの凄く申し訳無さそうな顔をして立っていた。…あれえ、なんか凄く嫌な予感。

「…それ、なあにい？」

「…拾った。」

いやそうじゃなくて、と言って顔を引きつらせる。黄昏が手を引くのは、

「子供だな。」

少年でした。

……いや、意味分かんないからね？

「……………依頼人だ。」

渋い顔の黄昏になんだか楽しくなってくる。こんなフツーっぽい少年が依頼人…ねえ？

「…へえ？そつか。」

それって、

「楽しそうな臭いすんねえ。」

もしかしたら棚ぼたかもしれないと俺は静かに目を細めて笑った。

一章 人生は思い通り（後書き）

原田さんが名乗ってませんが、まあそれは事前にアポを取ってたというところで（おい）

二章 電気のない都市（前書き）

ここからチャラさを前面に出していきます。

語尾のびのびです。

…今更ですが三日月はチャラ男。

二章 電気のない都市

「…んで？」

in・事務所。

とりあえずお話を聞きますかとリリィと少年と四人でここに戻ってきていた。

で、俺はソファで縮こまる少年を目の前に首を傾げる。ここは宵闇町、その中でも知る人の少ない抜け道を通ってしか辿り着けない五番街。何も用のない人間が訪れるはずもない…ていうか真つ当な人なら一生来る機会なんて無いだろう場所だよ？

「そんな所に君みたいな少年が来るなんて…」
よっぼどの事情お？と下から覗き込んで尋ねると、顔を背けられた。
ひどい。

どうしたらいいのさ、と困る俺と相変わらず顔を背けたままの少年を少し呆れたように眉を寄せながら見て、それからため息を吐いた黄昏が少年に声を掛ける。こつ見えて黄昏は子供受けがいい。男前だけど目線の鋭い黄昏は、愛想がいいとはいえないのだ。何それギャップ萌え？じゃあ保育士さんにも転職すればいいんじゃないの？…俺は笑つても逃げられるばっかなのに。……うんごめんなさい八つ当たりです。ていうかただのやつかみ？

一人でどよんと落ち込む俺に、うわまたやつてるぜこいつ的な顔をした黄昏が近寄ってくる。…ごめんなさいねー子供と会話一つ出来ないダメ人間でー。

「…子供に好かれる奴みんな死ぬ。」

「…急にどうした。」

「あ、声に出たあ？ごめん気にしないでえ。…それで、少年は何だつてえ？」

え、敬語じゃなくなったら途端に喋り方がウザイって？いやいやこれが俺の標準装備だもん、しょうがないしょうがない。慣れて、いや慣れる。

「ん、…母親を探してほしいそうだ。」

「…え？」

黄昏の最初のん、が可愛くて聞いてなかったに一票。…違うよ？別にBでしな関係とかじゃないからね？二人ともマジ女の子大好きだからね？…黄昏は知らないけど…とにかくホントなんだからっ！

…と思いながら珍しく眉間にしわを寄せたら、黄昏が何か勘違いしたようで軽く溜め息を吐いた。

「それだけでここまで来るなんて、普通なら信じられねえ話だが…、」

そう言つて脇のソファで小さくなっている少年を見て、また溜め息。そんなに溜め息吐いたら幸せ逃げるよ？そして結局どんな案件？

「政治家の知り合い「宗一郎おじさんは父さんのお兄さんです。…：そうか、悪い。まあその宗一郎おじさんつてのに母親搜索の助力を頼んだら、ココを紹介されたらしい。」

なるほど、母親搜索ですかー、と頷いた俺の思考が黄昏にもバレて

たのかなんか怪訝な顔された。やべえやべえ、これは話題を変えなきゃ。

「ふーん…そつかあ…宗一郎おじさん、で政治家ってえと、加賀美宗一郎氏かねえ？」

「加賀美？つて…ああ、たまに来る狐みてえなオツサンか。弟がいたなんて初耳だな。」

不思議そうに首を傾げる黄昏くんは、いい加減そんな動物みたいな感じに人のこと覚えないう方がいいと思う。名前で覚える名前で。と苦笑しながら、確か妾腹の弟さんがいたねえ、と教えてやる。

「…妾腹、」

同じセリフを呟いて、だけど表情の違う2人のコントラストが面白い。こんな町にいて特にこんな場所でそんな話聞き飽きるほど聞いてる黄昏の呆れたような顔と、まだ幼い…って言っても10歳くらいか 少年の、妾腹？何それ？な顔。

いいねえ、純粹で。

「…あの、」

俺はニコニコ2人を見つめてるし、黄昏はむすつとしてるしで落ちた沈黙に乗じるように少年が口を開いた。…あれ、今さらだけどこの子の名前知らないや。

「ねえねえ少年、とりあえず君、名前はあ？」

「…人に聞くときは、」

首を傾げ尋ねると、質問を無視されたのにムツとしたのかそれとも相当俺を警戒してんのか、なかなか賢い切り返しをされた。
…これは、先に自分が名乗れ、って意味だよねえ。

「…ああなるほどお。ええと、俺は猫谷三日月、気軽にミカさんって呼んでね？んでこっちは、」

ちらりと黄昏に視線をやると、一度瞬きをして返事を返される。

「さっき教えた。」

「…んー、そかあ。んで、今度こそ君の名前はあ？」

振り向けば、少年はぎこちなくこくりと頷いた。いやいや、だからほんと警戒しすぎだよ。何なの？泣くよ？

「…斎藤修哉です。」

「ありや、そりゃあ…」

「ミカ。」

普通、と言いかけた俺に黄昏が言葉を被せる。余計なこととは言うなと目で訴えてくるのはいいけど…顔怖いよ。初めて見た人にはきつと伝わらないって。

「はいはい。…んで、しゅーやくん、質問があつたんだよねえ？なあに？」

まあ、俺の知り合いには普通じゃない名前の人しかいないからそう思うだけかと自己完結して首を傾げる。…アレ、目ガ合ワナイヨ？俺の自意識過剰？

「…泣きたくなってきた…」

「あの、」

「あ、ごめん気にしないで。…それで？」

はい、と頷いて口を開いた少年とは、やっぱり視線が合わない。…
うん、別にいいんだけどね。

「僕、おじさんに道筋を教えられてとにかくここに行け、って言われただけで…。どんな所なのかも、なんて所なのかもよく分かってないんです。… 宵町五番街、って？」

「…あは、」

「そこからか…」

俺はもはや笑うしかない。そして黄昏はまたまた溜め息をついて額に手を当てていた。…ギャラは加賀美氏から貰えんだよねえ？

「ちよつと長くなるけど、いいかな？」

「よろしく願います。」

「じゃあえーと、まず街の構造から、ね？」

めんどくさいなあ、と思いながら、俺は口を開いた。

*

宵町五番街。

正確には、まほろし幻影町宵区五番街。

三分された幻影町の最奥部にあり、また最も危険なのが宵闇区である。まあなぜ宵闇区と呼ぶかという点、ただ単に宵闇区だとゴロが悪いというだけの理由なのだが。

それはさておき。

幻影町は、それ全体が“お国”では危険地帯とされる場所で、他所よりぐっと治安は悪い。けれど、町の中でも治安の悪さには更にレベル分けがあるのだ。

まずは、幻影町の入り口に位置する暁区^{あかつき}。学生の不良やチンピラ、並みレベルの893さんなど、比較的一般人に近い人間の彷徨く場所である。治安の悪さでいくとそこらの繁華街と大差ない。

次に、ちよつとヤバいぜ？な黄昏区。いかにも怪しげな人間ばかりが彷徨き、気を抜けば売り飛ばされるような町。暁区でこの町をなめてかかった新参加者が、ここで痛い目に遭うことが多い。あと黄昏まで来るとちよつと人外チックな奴らも出てくる。

そして最後がここ、宵闇区。

もはや非人間・異能者しかおらず、そうでなくては生き残れない。普通の人間が入り込めば即、死、または奴隷の仲間入りだ。更に宵闇区の怖いのは、誰も助けてはくれないということ。たとえ力があっても、暗黙の了解“弱肉強食”。他人のことには首を突っ込まないのが宵闇区のマナーだ。

*

「…んーとお、ここまではOK？」

「はい。」

引きつった顔で頷く修哉は、やっと自分があまりにも危ない場所に
来ていたと気づいたらしい。そんな…と絶句していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4185y/>

ようこそ、宵闇町五番街へ。

2011年11月17日13時20分発行